

## 復活（４）

1.この地球における生命誕生の時期をテーマとする時、微生物を生命として捉えれば、それは 30 億年程前となる。そして彼らの力により、本格的な形ある生き物(植物)として生命が登場し出したのは、およそ 5 億数千万年前。動物は、その 1 億年程後の、4 億 7600 万年前となる。人間の原型のような存在は、およそ 2 億 3300 万年前に誕生する。

それらへの形ある根拠は無い。しかし、そうである現実のその原因には、容易に触れることが出来る。この地球に居れば、これまでの、そこでのどの時の原因もここに繋がるという、生命世界のシンプルな真実。自由に時空を透過する原因の世界(次元)では、時の流れは伸縮自在である。かつての出来事(から)ではなく、そこでの原因の変異・変化から、それに反映される出来事は手に取るように把握される。そこには、研究や分析といった、結果からなる思考型の次元は近づけない。

2.微生物は、中庸そのもの。その働きが酷く影響される時でも、それに逆らわず、新たな流れで、中庸を生きる。消失を経験しても、決してその元となる原因が無くなることはなく、増大を重ねても、必要となれば一瞬で姿を消す。微生物は、地球と共に、地球感覚の本質をそのまま生きる。

地球の核からのその生命の意思(エネルギー)が、地表と

HP「無有日記」

<http://www1.odn.ne.jp/mu-mew/>

いう次元で形となった、微生物。およそ6億年近く前、彼らは、水と光と空気と遊び、数千万年という長い時をかけて、土をつくる。そして、土に住み、土の中で、個性豊かに(土質に合わせて)自らを多種・多様化させていく。

土の中で生きる微生物たちは、遊び心全開に、自分たちの可能性を楽しみ、地球内部からの生命力のその繋ぎ手となる役(仕事)を次々と拡大させる。太陽の光を活かし、水を利用して、土の外へと、生の活動を発展させていく。

5億数千万年程前、彼らは、植物の姿を生み出し、その生育と土に還る時のその全ての変化に対処しつつ、それを繰り返して再生し得る流れをつくる。それぞれの環境からなる彼らの個性は、それぞれに形の異なる植物を次々と作り、それは、どこまでも広がっていく。

植物が誕生し、地上の風景はそれまでとは変わり、微生物も増える。元気に育ち、元気に枯れる植物のその姿を通して、土の中の世界も変化を見せ、彼らの能力も力を付ける。植物を生み出し、植物になった微生物は、空気中の元気を普通に、自由に交流し、太陽と遊ぶ。彼らの日常は、健康的に更新されていく。

3.植物の生のサイクルのその隅々にまで関わり、自らもそれとなって、他との融合を重ねつつ、変化・成長の原因でい続ける微生物。いつしか、その植物の営みの中に、自分たちの何気ない表現の進化(という名の普通)の形として、微小な虫が誕

生する。

虫たちは、微生物の分身のような役を担い、その変化の時を楽しむ。植物の生育の可能性を高め、共に土を活かし、植物の生の環境に自らのそれを重ねて、自然界という次元のその基本の中に居場所を確保する。虫の中でも微生物は普通に生き、それまでの活動の範囲を広げ、それを更なる普通へと馴染ませる。彼らは、見る見るその生の多次元化を実現させていく。

地球全体の凍結が崩れて、溶け出したことを機に、その生命活動を活発化させた微生物であるが、それを阻もうとする天体規模の負の意思による働きかけは強力で、それにより、その動きは大きく鈍る。そして後に、磁極がズレる程の変動が生まれるその時(5 億 2800 万年程前)、地上には、それまで地球のどこにも無かった腐敗型の微生物が(その負の影響により)生まれてしまうことになる。

元気に枯れ、その生命力を次に繋ぐことを普通としていた植物は、要らぬ負荷を覚えながらも、それまでの生のサイクルを保とうとするのだが、腐敗型の微生物の出現により、その自覚もなく衰え、朽ちるという経験をするようになる。そこに在る生命の意思の性質(次元)に合わせようとする微生物は、破壊と停滞の力に付き合わされることになり、無くてもいいはずの腐敗という次元を手にしてしまう。

4. 元来、この地球には、腐るという世界は存在せず、停滞も

衝突も、そこでは全てが無縁となる。どんな生命も(動物も人間も)、元気に生き、元気に枯れ、ただその時々の状態の変化が、そこには在るだけ。衰えとか、老化とかの次元を、生命は知らない。

それは、地球の意思の形である、全ての生命活動に関わる微生物が、地球のためとなる手と足の役を何十億年も担い続けて来ているから。その意思は、健康・健全でいる、生命力の源泉。不健康とか非生命的とかの世界は、元々この地球のどこにも無い。

であるはずなのだが、一度も出会ったことの無い物質が在れば、微生物は、その影響をそのまま受け、その性質へと姿を変えてしまう。全てを受容する中での必要性として、そこに在る物質のその原因と重なり、その活動の力となる。不健全な生の営みのその姿を放って置くことは出来ず、それまで無かったことでも、そうである事実、彼らは反応する。

平和と健康だけの生命の意思の形である微生物は、争いの意思に出会えば、争うことを知らないゆえに、その影響を受け、不健康な原因に触れれば、澄んだ空気に重苦しい粒子が入り込むように、その健康は力が無くなる。それでも基本は、全てを生かす中庸。それは、生命としての変化を普通とする、地球の意思。腐敗型の性質を帯びても、それが本来ではないことは知っている。停滞を余儀なくされても、そのままではいることは良しとはしない。

それらの全てが一度も経験の無かったことであるゆえに、

撃)、隔たりや非生命を普通とする行為は無い。

それが、何億年もの間、壊れたままだった地球。それを修正・浄化しないまま平気で生き続ける、嘘の人間。その地球自然界に有ってはならないことが、ここで形となり、それを処理すべく時が始まった。それは、原因からの完璧な動きだから、何びともそれを阻むことは出来ない。すでにその中に居る。

石灰石との融合を前に、どんな重たい(否定的な)感情も、そのままではいられない。無有日記の原因により、どんな人も、自他の変化を止めることは出来ない。一切の計画も目的も無い(生命としての)原因のままの変化と創造は、全てが予定通り。その時までそうであることも分からず普通に歩み続けたこれまでが、この地球に託された生命たちの大いなる仕事となる。

「復活」の原因を力に、太陽系は、全く病んではなかったあの頃へと、新たな、何百万、何千万年の時を歩み出す。この地球では、生命たちの自然な姿が主導権を握り、土に還らない(地球に抵抗する)凶暴さや残忍さの次元は姿を消す。その時々の変わり様を余裕で眺め、それを大きく包み込む安心だけの原因で、いつの日か、月を回す(月に新しい子供服を着せる)。太陽も地球も天体たちも皆、笑顔になる。復活の時を、みんな遊ぶ。(by 無有 11/15 2018)

ここに居て、これまでを経てのこの今だからこそ経験できる、その融合空間。そこに、地球が居る。ずっと何億年もの間この時を待ち望んでいた、彼の想いが在る。ひとりひとりが地球になる。

8.人間にしか出来ないことをするために、人間としての生を経験し、人間だからこそ出来ることをして、生命としての原因の力を成長させる。地球が真を外さずに地球で居てくれたことで、地球のように真を生き、生命そのもので居続けた人間たちは、その経験の全てをここに繋ぐ。彼らは、地球を感じつつ、地球の外側からも地球を観、地球の望みと太陽系の普通を自らの中で生み出していく。

「再生」の時を経て辿り着いたこの時代と、更なる原因の創造に不可欠な、この「復活」の次元。そのことで、生命たちは、太陽のように、何もせずとも事を為し得る原因を自らに通し、地球のように、身体表現のその可能性を多次元的に高めていく。

原因の世界では、月が自転を止めるよりもずっと前から始まっていた、生命たちの普通。この時のために在ったそれも、ここからは、二度とそうではない(病むことのない)時のための、地球規模の原因にその姿を変える。天体たちも、安心して、本来の自分へと変わり得る新たな道(変化)に乗る。

生命は、変化そのもの。生き物たちは、そのことを基本に、共に生かし合い、自らの分を生きる。そこに、争いや衝突(攻

それが新たな経験となってしまっているだけの、微生物の世界。それを本来へと変えるために、更なる知恵と実践を普通とする。地球の意思をより力強く具現化する原因でいて、彼らから、無くてもいい経験を外す。それが、この無有日記を通る。

5.植物本来の生が乱れ出し、土の中での微生物たちの活力にも影響が及び出した時、それをそのままにはしない彼らの本能は、土に縛られずに地上を自由に動き回る新たな生命の存在を生み出そうと動き出す。停滞感を帯びた植物関わりのそれまでの環境が、それによって刺激され、浄化されて、腐敗の原因の入り込んだ生命たちのその空間も次第に自然なものになるという、次なる変化の流れを、地球の意思と重ね合う。

その試みは非情に厳しく、困難を極めるものであるが、地球の中心が揺さ振られる程の異変が地球の外で生まれたことによる、そこでの磁極の移動によって、幸運にも、その動きは加速する。地球が海中心になったことで、無生命化の負の影響を地上のようには被っていない海の、そこでの生命たちが、その新たな試みに参加する。地球の生命力のその原因の力も、海の中で、それまでになく活動的になる。

微生物は、どこで、どんな風でも、それぞれは地球の意思の上で呼応し合い、自然界での調和と変化を基本に、その動きを連動させる。海と陸とではその環境が大きく違っても、そのことに、全く支障は無い。新たな必要性が地球規模のその

環境の中で生まれたことにより、海の微生物たちは、陸へと向く。そこに、海の生命たちを連れて行く。

およそ4億7600万年前、各地で、動物の元祖的存在たちが、次々と陸に姿を見せる。海での生活が固定されても、そうでなくても、皆が一斉に、自分たちの基となる微生物たちの動き(方向性)に合わせ、その変化を楽しむ。そこに不安や大変さは無い。ただそうであり、そうであろうとする経験が、彼らの中に在るだけ。その変化の様は、活発化する地球生命体の意思に支えられ、面白いぐらいの種類と数を増やし、成長し、地上の世界を元気にする。

6.動物たちの自由意思は、決して地球の望みから外れず、植物を取り込み、生命を繋ぎ、そして土に還るというその生のサイクルは、例外を作らずどこまでも自然に広がり、健康的に伝わっていく。植物たちもそれに応えようと、生きる力を付け、食べてもらうことで果たせる自らの分と、土の中での元気な営みを、皆で楽しむ。動物たちの生命力の安定とその変化は、腐敗・停滞の原因に力を出させず、少しでもそこに在れば、微生物たちの力と共に、それを浄化する。自然界は、動物たちの活動により、その本来を普通としていく。

それに危機感のようなものを覚えた非生命的な破壊の意思は、それではとばかり悪知恵を働かせ、ある地域のある限定された場所の植物たちばかりを重点的に病ませ、それを食べてしまった(食べざるを得ない)動物の本能に負荷をかけて、

では、神社を通して、多くの人がある蛇と関わり、鉛のような原因を備える存在となる。心ある素朴な人は、いつの時も、その本来を不自由にさせられる。

7.「太陽の音楽」「再生」と、そこでのひとつひとつの融合体験を経ての今があれば、この「復活(6)」に居る自分に、新たな原因の時を重ね合わせる。

余裕と安心を普通に、確かな想いで地球を元気にする。そのための何気ない実践を日常に、普通感覚で、地球の望みに応える。地球に託された仕事を、地球が残してくれた貴い原因を力に、楽しみながら表現する。そして、太陽を安心させる。

石灰石の原因の中に在る地球の意思を、自らに取り込む。それは、地球の切なる想いとその天体規模の知恵を未来に繋ぐということ。その通り道となって、地表を、地球本来のそれにすること。この地(地球)に人間が誕生したことの意味は、そのことで、その質(次元)を一気に成長させる。そして、地球と共に、天体たちも喜ぶ再スタートの時を迎える。これまでの原因の蓄積と人間としての実践は、この時の原因の創造に大いに活かされる。

石灰石との融合は、生命本来の、その芯の部分を力強くする。それだけで、動くもの。その上で、変わり出すこと。その様は、人それぞれのこれまで(の原因)が反映されるものだけど、そこでの感覚的経験のその形無き働きかけは、余裕で常識の次元を超える。

きる原因は自ずと変化に乗り、その精妙さと余裕(分母)は、そのまま限り無いものとなる。それだからこそ、自然に触れ得ることとなった、鉛に潜むその不穏な原因と、その元となる姿無き無生命化の意思。そこに在っても、何も分かり得ず、どんなに時間をかけても、一切の接点を持つことの出来ないその次元は、無有日記の変化の中で、ごく普通のことのようにその姿を顕にすることになる。

少しでも思考が先行すれば、どこまでも見えなくなり、感性に僅かでも感情が絡めば、何をしても永遠に分からなくなってしまふその姿(次元)は、形無き抽象の世界で、多次元的に暗躍する。そうであるから、思考を力に、動きの無い結果(過去)を生きる人の中でそれは活躍し、不安や怖れ(怯え、嫉妬)の感情を内に潜める(隠す)人の中で、大いに仕事をする。

鉛のその原因に在る非生命的な力は、それと融合する、重く流れない非人間性を普通とする人を元気にする。内なる(真の)変化を拒む人ほど、その姿勢は応援され、体裁を繕い、本音と建て前を上手く使い分ける人間のその嘘は、それにより力を付ける。鉛の、そこに在る形無き負の原因は、心無い人の健康の基となり、心ある人の動きを止める重たい感情を持つ人に、安心をもたらす。

地を這う蛇の、その不自然な姿を想像してみる。元々地球には存在しなくても良かったその妙な生態と感情(本性)は、鉛の原因と密に繋がり、そこに無生命化の意思が通ることで、何もしなくても自然界は重くさせられる。悲しいかな、この地

その脳を不自由にさせていく。腐敗型の停滞と破壊の原因を染み込まされたそれらの植物を通して、少しずつ、確実にその姿を変えていく動物が現れ、不穏という、自然界には最も相応しくない空気感が生まれていく。

そして、その影響は広がり、その負の密度も増して、動物たちの世界に、快活に動かず、他と戯れ自由に走り回ることもしないで、ダラダラと停滞を地で行くような、あり得ない生き物が現れる。それらと共に居る微生物も、その性質(原因)に染まり、彼らの生態に付き合う。それは、どこまでもそうであって欲しくはなかった、不健康な現実。

そこから、恐ろしく信じ難いことが生じる。それは、ケガをして、休息を取りながら静かに回復を待つ動物や、睡眠中の動物を、別な動物が襲い、食べてしまうというもの。脳の働きを不自然にさせる、変異を起こした植物は、動物の本来の動きを鈍らせ、その活動源に凶暴さを組み入れて(備えさせて)、動物食(肉食)へとそれらを変えていく。そのことで、自然界は、どうにもならない負の原因を固めることになる。

(地球規模の変動により)地球内部からの生命活動の原因の働きが盛んになったことで、恐竜と呼ばれる巨大動物に成長する動物も出てくる(およそ4億4500万年前)。彼らの中に現れた肉食動物は、微生物たちにとって、最も厄介な経験となる。

7.肉食動物が誕生し、その営みが普通となって数も増えてい

くと、なぜそれが生じたかのその原因となる事実は遠くに消え去り、そうである彼らのその姿がそのまま事実として連ねられることになる。そして、初めからそうであったかのように、その上での生命たちの自然な様がそこには在り、事の本質と自然界本来の望みはその姿を無くす。

生命世界において生じる全ては、そこでの変化の形であるが、肉食動物の存在は、その質を酷く低下させ、そこに潜む歪な原因は、地球自然界のそれまでの普通を異常なものにしていく。植物を通して地球からの生命力を損らずに生きること自体、自然界には有ってはならず、そのために土に還らない(還れない)その負の連鎖は、地上の健全さを侵し、地球の意思と繋がる土(地中)を腐敗へと変えていく。微生物の世界も、不自然で、動きの無い不穏な(腐敗型の)原因が力を持たざるを得なくなる。

地球を完全無生命化させようとした意思は、地球の、他には無いその強力な自浄力を前に、それまでの方向性を変換させ、地球と共に生きる微生物の意思をねじ曲げ、それを操ることで、地表全て(の次元)を力無くさせる動きを取る。滞りと衝突の原因そのものの、他の動物を食べるというそこでの生態は、廻り回って地球の息吹を不自由にし、その姿(活動)を不安定にさせる力へと発展する。支配と破壊を愉しむこと以外何も無いその意思は、そうである(自らの)原因の中の恐怖と狡猾を肉食動物の行動に重ねて、微生物の次元を停滞させ、地上を重苦しく、不健康な性質で蔓延させていく。

意思)を通して、次々とこれまでの負の原因は浄化され出すということ。

そのために、「人間」で心の主導権の握り直しをし、「仏陀の心」で真を自分と重ね、そして「太陽の音楽」で、要らない経験のその原因が外れる道を創る。「再生」では、この地における生命の歴史のその内実を常識の域に収め、それを通して意識を広げた「復活」では、全ての元となる太陽系の(天体たちの)原因に触れる。

数百万(数千万)年先には、この地球の生命力も絶えてしまうその負の原因を強める存在が居れば、数百万年先でもずっと元気な地球の、その力強い原因で居続ける。そうであることもあたり前に時を癒し、自然体で、自然界と共に変化に乗る。そして、水や空気と自由に戯れ、光といつまでも遊ぶ。

地上(地表)での不自然・不調和は、地球が嬉しい生き方無くして確実にその原因を変え得ることは出来ないという、原因深くからの何でもない普通。その地球が最も嬉しい、地球が本来ではなくなってしまうことへの感覚的把握と、それによるそれまでに無い原因の動きは、地上での全てを、自然で調和あるものにする。地球の外側にあるその原因への対処を、地球に託された人間が担い、人間の次元から、生命としてのその可能性を拡大させる。

6.この時代に生きていることに責任を覚え、その責任を地球感覚のそれとして、自然界が安心する生を普通とする時、生



質を変え得る原因を持つ鉛。その成り立ちが、天体の動きを不自由にさせる程のその負の威力への(地球の)抵抗からであるゆえ、そこに在る姿無き破壊の力は、他に何も分からせずに、生命たちの自然な動きを滞らせて、簡単に本来の変化を止める(不安定な核を力に本来を変異させる)。それは、その原因が土と融合できない(土に還ることのない)肉食動物の、その腐敗型の連鎖の原動力となる。

そこに在るだけで、それなりの仕事を充分し続ける石灰石であるが、それでも万全ではない時が連なる中で、地上には、動物たちが姿を現し、後に、やむ無く人間が誕生する。そして、地球の切なる望みを具現化する数千の生命たちを中心に、時代は流れ(「再生」)、生命と非生命それぞれの原因が対峙するという、奇跡という名の普通のその時を、この現代に迎える。

生命を生きる普通の人間たちは、石灰石の意思を自らに通し、地球の普通を繋ぐ。その原因深くで、月や金星の悲しみを浄化する程のEWを重ね、人間にしか出来ないことをする。鉛の中に潜む負の原因を限り無く砕き、地球を本来にする。

5.何億年もの永い時を経て、奇跡的にこの無有日記の在る時代を引き寄せた、地球の意思。それが意味するのは、この今は、地球に託された人間たちが、地球のための原因となる仕事を最大級に表現する時であるということ。そして、そのことで顕になる、それを阻もうとする人間のその本性(無意識の

8.人間は、地球の、その放っては置けない不自然な在り様をどうにかするために誕生する。どんなことがあっても、それをそのままにはしない原因で、その流れを僅かでも変え、どんなに時間がかかっても、その全てを本来にするそのために、人間は地上に姿を見せる。

微生物の力を借りずに具現化される人間という存在の、ここでの生命の意思は、付き添う微生物が、どんな時でも余裕で本来でい続ける(い続けられる)という次元の原因を備え、その基本能力が表現される中で、それは、腐敗・停滞型の微生物を元の(甦生・再生型の)性質へと変換させてしまう程の力を普通とする。植物でも動物でもない次元のその表現力は、何もせずに何かをし得る原因の自然な形であるゆえ、衝突も争いも(不調も滞りも)一切ない中で、それは時を変える力となる。

やむ無く力を失くした微生物たちと、厳しい中でも普通を守り続ける生命本来の動植物たちは、人間の誕生にこの上ない喜びを覚える。地球も、生命力の原因を人間たちと重ね、共に、その回転(躍動)を力強くする。

人間は、およそ2億3300万年前に、この地球に誕生する。そこには、太陽の光の無限の能力と、全てを生かす生命源からなる意思が加わっているため、その経緯は実に不可思議なもので、現代の人間の(思考の)次元には永遠に触れることはない。そして、それ以降は、その最初の出来事が不要となるため、誰もその次元には入れず、後の人間が(現代人の全て

を含め)それを知ることは無い。

そんな風にして、数千の人間(の原型のような存在)が姿を見せる。本人たちも、その手前の状態を知らず、気づけば人間時間が始まり、人間としての生が動き出す。それは、ある時の、自然界に存在する(存在し得た)ある物を通り抜けるようにして、その空間に、人間という形が生まれる。

彼ら人間のその本質となる部分と、生命としての身体表現の姿には、「再生」を通して、ある程度触れることが出来る。彼らの存在の意思は、地球の望みそのもの。ただそのままで居て、時を変え、空間を癒す。それは、地球の貴い財産。

そして、そこに在る、何億年もかけて大きく本来からかけ離れてしまった、地球自然界の生命たちの姿。太陽時間の中で地球という時の流れに乗った、彼らの人間時間は、現在も続行中である。地球にとって要らない原因を処理(浄化)しつつ、新たな原因のその確かさを成長させる彼らは、これまでの経験の原因全てを活かし、地球らしさの道づくりを実践する。何千万年も経っても、これからもずっとその姿は変わらず、地球自然界と、生命たちを、本来の世界へと案内し続ける。(by 無有 11/04 2018)

ら、永遠に流れ出し続ける。

3.地球が溶け出したその時から、地球は、太陽と共に、新たな生命誕生の下地づくりを加速させ、微生物たちに、そのための活躍を促す。その一番の理由(目的)は、地球の生命力に負荷をかけ続けるその物質に、より細かく対応するため。決して放っては置けないその無生命化の意思を確実に浄化する(力無くさせる)ために、そこに在る全ての負の原因に対処し得る材料を生み出す。そこに微生物たちが深く関わり、海が、その力強い支え役となる。

その手段となる物質は、後に何千万年もの時をかけて形成された石灰岩(石)。以前は存在しなかったそれは、同じように地球には無かった、停滞と腐敗の原因を備えるかの物質の出現により、地球発の知恵を力に生み出される。

その元となる、殻を持った海棲生物は、地球が最も辛くさせられる存在への浄化力を備える生命として、その確かな前段階となる基礎の時を皆で経験する。そこに在る原因は、そのまま地球の意思。全ての生命の源となる海が形となったその鉱物の力により、地球は、生き存える力を強くする。

4.地球が、時の必要性を形に、その登場を要した、石灰岩(石)。それは、無生命化の意思と繋がる鉱物の中の、その鉛成分への浄化作用を備え持つ。

そこに在るだけで、不穏で不健康な風景へと、その空間の

を、心の風景に、仲間として招き入れる。

2.地球を覆った、水星、金星の時とその質を同じくする、重く、粘着性のある姿無き物質(粒子)は、地球のしぶとさに対し、しつこくその密度を強め、繰り返し何度もその無生命化の働きかけを重ねつつ、永い時を経て、地中へとそれは染み込んでいく。

その後、地表全体が凍り付く時を地球は経験するのだが、その間、地球は、厳しい状況に耐えながらも、その地球に在り続けてはならない腐敗型の原因をどうにかしようと、そのための自浄活動を内部深くで活発化させる。

その正念場とも言える動きで、地球は、その物質の特性を可能な限り把握し、そしてそれを外へと押し上げるのだが、あらゆる知恵を駆使しても、どうにもそれは上手く行かず、それでも、一億年以上かけて、その粒子に潜む負の原因を形に固めて、ある種の鉱物の姿へとそれを変形させるところまで事を成し得る。そして、どんなに時間がかかっても、後にその鉱物の無生命化の原因を辿って、一連の破壊力のその元となる意思へのEWが可能となるであろう道を生み出す。

地表が凍るという経験は余りに酷な状況であるが、そうであることへのそれまでに無く強力な対処という新たな経験が、思いがけず、天体規模の浄化へと繋がる原因となって、太陽系を刺激する。全てを受容し、それでも事を変化に乗せる、そこに在り続ける確かな意思のその原因は、この地球の中心か

## 復活（5）

1.「再生」から「復活」へと、時空超えの列車を乗り継ぐようにして辿り着いた、この「復活(5)」。人としての経験枠の中に在る思考の質の、そのあるべき姿への変化は、「人間」や「仏陀の心」「太陽の音楽」に任せ、ここでは、人間時間を余裕で眺める次元からの発想を楽しむ。そして、そこに在る、地球にとっての再スタートの時に、この地球に生きる一生命として参加する。それは、これまで一度も無かったこと。ここに無有日記が存在することのその意味が、新たな経験創造の時へといざなう。遊び心を普通に、子供心そのものになる。

10億年以上も厳しさを強いられ(受容させられ)、大変な中に居て、今もそうである地球。そのことを冥王星や火星などの他の惑星の異変と、その影響などを絡めて、EWを重ねつつ書いてきているが、この地球が、他と違ってどうにか持ちこたえて来たことを考えれば、この地球から発信する地球感覚の(地球そのものの)原因によって、天体規模の望むべく変化が生まれるであろうこと(可能性)を感じ取れる。

地球のために出来ることを考える低次の世界を遠くに、ただ地球が嬉しい自然体の自分を普通に生きる。自分の内なる原因(心の性質)と同じような人がたくさん居れば地球は直ぐにでも変わる、そんな自分を生きる。そして、地球になる。

## 復活（6）

2.地球を大切に思う時、人は、地球の気持ちになる。そして、彼が何より感じて欲しいことを共に感じるそのことの大切さを思う。それは、地球に生きている人間の普通。

地球は、かつて共に過ごした月が、生きる力を失くし、自ら回り続けることを止めてしまったその姿を記憶に残す。それは、地球にとって、最も辛く、悲しい出来事。そのことを感じてみる。

出来る、出来ないの次元を離れ、それで何が生まれるのかという思考も外し、ただそれを感じてみる。一度もそんなことを考えることもなかったこれまでの経験全てから、そのことは、これからの経験を自由にする。そして、経験が変わる。

新たなその経験は、気づけば思考が柔らかくなる時を引き寄せ、感情も、思うようにはならないその重石を外す。そして、余裕と安心が主導権を握る。地球の悲しみを思うという、それまでに無いそのあり得なさは、脳の中の記憶(の性質)を解放し、頭を使わず、(地球と繋がる生命本来の意思に)頭を使わせる原因の働きを馴染ませていく。

そのことで、それまでとは異なる内なる世界を感じる自分が居る時、地球は嬉しい。地球の安心は、植物を中心に生命の原因が循環する、地球に生きる生き物たちと微生物たちとの自然な融合と変化。その自覚もなくそうである彼らの次元に人間が加わることは、地球の望み。地球のことを普通に思えるその姿は、そのまま、人間が生み出したこの地表での負の連鎖を決して次には繋ぐことのない原因となる。

1.地球に生きる一生命としての人間本来を普通に生きるという、生きる原因の質のさりげない安定。そうであるための原因を力強くするために、思考から始まる動きを遠くに、思考の手前で動き出す自然な原因の働きに思考を付き合わせる。その本来がそのままである時、その人の生きる原因は、地球の生命力のそれと繋がる経験を普通とし、他の生命たちと共に、地球を支える。それは、人間の、その人間らしい原因の形。

そこでは、思考が生命としてのそれとなり、過去(結果)を引き連れる歪な(非生命的な)思考は、どこにも無い。分からないままでいられる次元とも自由に遊び、その意識もなく為し得ることを、自然体で楽しむ。言葉(思考)も記憶も通用しない動植物たちの世界は、一生命としてのその人間の姿に安心する。

その生命としての思考(人間)をも包み込む世界からいくらかでも流れて来る、この無有日記の原因。「復活」も、この辺りで、その具現化の密度を高める。確実に時を変え得る材料として、全く非常識とされることを形にし、それを6章とする。無限の仕事をし続ける原因で、歪な普通のその大元となる負の原因を砕く(浄化する)。

それと遊び、好きなだけ変化の時と戯れるために、人間発の、地球規模の処方箋という名の、これ以上無いふざけた話

系)は大きく外側となるが、原因の次元では、内なる世界の、その中の中である。人間時間に地球時間が付き合い、そこに太陽時間が顔を覗かせる。内と外がひとつになる。

復活は、甦るということ。「復活」は、その原因の仕事を担うということ。この地上で初めて人間となった生命たちの、その時のそれぞれのひとつの意思が、永い時を経て、ここに形になる。そして、復活が始まる。すでに、いくつもの未来が、この今の「復活」の原因(の光)を受け取る。(by 無有 11/11 2018)

3.そして、地球が何より嬉しいことを共に思う。それは、月が回ること。かつてのように月が元気に動き出すこと(かつては11時間10分程で自転していた)。人間がそれを思うというその姿に、地球は、予期せぬ感動を覚え、涙目になる。それ程嬉しい。記憶の中の辛い経験は、そのままで無くてもいいところへと引っ張ろうとする力を感じ、それだけでも充分な、安堵の時間をそこで過ごす。

何億年も、止まったままの月の存在を前提に時を連れて来た、地球。それを動かそうとする発想自体、それは非常識となり、経験としても、どこのどの思考とも繋がり得ない。それだから良い。そのことで生み出される原因は、どこまでも自由。そのことの意義も影響も、一切無視される次元のものであるゆえ、その中で遊ぶ。どこにも無い性質の思考を時間と重ねる。

月が回り出すことは、あり得ない現実だけど、月が止まったことも、あり得ない現実。地球も、どうしていいか分からない中に居る。しかし、どんなことも、始まりは、それまではどこにも無かった、あり得ない動きや発想から。現実には、それがどんなであれ、その元となる原因がそこには在る。その原因になってみる。この今の発想を、この地球発の新たな原因として、積み重ねていく。

原因は、形が無いけど、その原因に見合った現実には、次なる時のその必要性の次元に付き合う。その必要性も、基は原因だから、それが地球(という次元)にとって大切なものであれば、必ずそこへと原因は動き出す。これまでを思えば、何百

万、何千万年先でもいい。その始まりが、今、ここで確かな原因となれば、それで充分。形はずっと先でも、その時のための原因になれば、そこまでのこれからが違ふ。つまり、すでに月が回っている現実の、ずっと手前のその始まりの時を生きるということ。その今が、ここに在る。

4. 月が自ら回り出すための準備運動が、数百万年先のその時に向けて始まった。どんなことがあっても決して本来を失うことの無かったこの地球からそれが動き出したことを、太陽は誇らしく思う。その無限の働きかけに、他の天体も刺激される。

木星と土星は、その原因の力添えとなれるよう、自らの中心のその生命力(磁場)を少しでも高め、太陽に余裕を与える。火星は、お荷物にならないよう、余計なことはせず、ただじっとそのまま奇跡の時を待つ。

かつて、他の天体に大きな負荷をかけてしまう立場をやむ無く引き受けさせられてしまった、火星。それに充分耐えていても、力を落とさざるを得なかった、木星と土星。そして、地球の辛い経験。月が動くためのその後方支援の立場にいる彼らのその真剣な姿に、金星の意識は変わる。その経験から、彼が覚える責任は、他よりもずっと大きい。

結果的に地球に強大な影響を与えてしまった、金星。どうにもならない状況とはいえ、地球に無くてもいい経験をさせ、月が止まるその原因も、その多くが自らを通して作り出されてし

繋がる原因を、共に支えようとする人間(自分)が居る。

自然界に生きる動植物関わりの地球規模の異変は、地球がその自浄力を低下させてしまう程の危うい事が、地球の外で起きたことの現れ。太陽時間におけるそこでの原因の形が数億年分の一に縮小されて文字になった「復活」は、それへの働きかけを可能とする、そのための原因の知識。遊び感覚で、楽しみながら、それを自らに染み込ませる(組み入れる)。そこからでしか始められないことがある。

8. この「復活」が形になり得たその事実は、受け手の中で、力強く、きめ細かな原因の仕事をし続け、事を本来へと変え得る流れを生み出していく。地球が嬉しい原因の始まりがここには在り、太陽系も、そのことに反応する。それを普通とする生命たちは、そのまま、自らの原因を天体規模の変化へと響かせる。

「復活」の内容は、どの箇所を読んでも、これまでの知識世界には無かったものばかり。知識(結果)から始まる次元を遠くに、原因を動かす、原因だけの知識が、そこには在る。知識世界の重石を外し、好きなように、これまでになかった変化の時を経験する。掴みどころの無いはずの次元が、気づけば、自分のものになる。

「復活」を、生命としての存在のその芯(核)とすれば、その周りには、「再生」が在り、その外側には、「仏陀の心」と「太陽の音楽」「人間」が在る。空間としては、「復活」のテーマ(太陽

意識体(原因の意思)を重ねるといふ、地球でのその人間経験の準備要素を備えるべく仕事を、それぞれが担う。地球も、太陽系の一つの天体。その地球が、非生命的な影響を被るきっかけとなった、他の天体のその歪な経験(の中身)を把握することは、地球にとっても、太陽系全体にとっても、とても貴い経験。共に協力し合い、支え合って、それぞれは、各天体とひとつになる。そして、そこでの全てを内なる世界に潜め、他の仲間と、この地球で初めての人間経験を始める。

7.人間が居なくても平和で健康的な地球であるはずなのが、そうではなくなってしまうために、その原因を処理し、地球を元の状態へと戻すために地上に姿を見せた、人間。その生命としての人間の基本を知れば、争いも病気も(不安も怖れも)、無くてもいいものであることが分かる。動きの無い結果(過去)や形式にこだわるのが、その基本への抵抗であることを理解する。

人間の仕事は、それらをさらりと無くし、その上で、地球自然界の不自然な原因を浄化すべく、生命としての原因を生きること。何かのために向かうことも、頑張ることも、そのことへの拒否反応。どうにかしなきゃと思考を忙しくさせることも、偽り(欺瞞)の姿。ただ普通に人間を生きればいい。

地球に生きるというのは、太陽系の営みに、一生命として参加しているということ。その地球に地球らしくない風景があれば、当然その対処に自らを活かし、太陽系の調和と安心に

まった。

何億年も経った今でも止まったままのその姿は(かつては一周 163 回自転していた)、他に負の影響を及ぼす材料となり、地球が最も負担を覚えさせられる存在として、そこに在る。その不健全な引力(重力)により、太陽の光も少なからずその力を削がれ、地球を困らせる。金星は、そうである事実を受け止める力を持ってないまま、厳しさばかりを募らせる。

5.そのことに、水星も緊張と責任を抱く。事の手前には、自分の力の無さがあつたこと。やむを得ない経験であっても、太陽系全体の調和が元には戻れないままのその原因でい続けてしまっていること。太陽の一番近くで、太陽に最も影響を及ぼし続ける水星は、月が動くという地球発の原因が自分の場所(のかつての原因)を通る時に、それまでのままでいることがないよう、力が入る。

だからと言って、何かが出来るわけではない。ただ、その意識を強め、その次なる原因に真剣に加わること。太陽からの光を力に、自らの回転を少しでも速くさせる核を取り戻すこと。そうであろうとし続け、その時へと向かう。かつては余裕で 15 時間程で自転していて(公転時の自転回数は 233 回)、小さいながらも、滑らかな天体間の動きにおいて担うものは大きかったという記憶を持つから、その再生の時を思う。

月と水星、金星は、衛星と惑星の違いはあっても、その状態は、それ程変わらない。それぞれの核は、その役を失い、生

命体としての天体の力は無い。本来の磁力(磁場)も力無く、自転もゼロ(と思ってよい)。公転は、太陽(地球)が、そこに居続けられるよう、引き連れ、回していると言える。

その 3 つは、それぞれが順に、同じような経緯を辿り、停止状態となっている(それを仕向けた存在にとって、地球の姿はあり得ない現実だが…)。そして、地球は、金星の変化を望み、太陽は、水星が元に戻ることを願う。それが月の自転には不可欠で、月にとっても、そのことで、その可能性はより高まることになる。月が自ら回ることへの地球発の意識(原因)は、密に重なり、増幅する中で、水星と金星の、それぞれの太陽と地球との関係性を調整する流れを生み出す。

と、簡単に文章にしているが、その原因の働きかけは、人間の思考の次元を遥かに超える。それでも、文字にし、その域には無い EW を続け、人間が触れ得ない次元の(人間にとって重要な)その原因の動きを促す。原因のままの原因の世界が言葉になること自体、実のところあり得ないことだから、言葉が伝え、形にしようとする世界を通して、そのことによる何気ない(原因の)変化を楽しむ。それだけでいい。

原因を普通に生きる生命本来の風景では、知ることは、その時まで知らなくても良かった知っていることのその確認作業のようなものとして在る。全ては原因。どこまでも、どんなところにも多次元的に繋がる、原因の営み。「復活」は、ここでのそれが、太陽系の原因と繋がっただけ。易しい表現で、未来に、その、この時の経験を繋ぎ、地球を本来にする(負荷が外れて

楽に公転でき、一周 373 回転ぐらいになる)。月も、他の天体も、それに参加する。

6.この地上に初めて人間が登場した時、彼らの元となる生命の意思は、地球だけでなく、太陽系の他の天体の状態も当然知り、それゆえに、逃してはならないタイミングとして、2 億数千万年前のその時の出現を選ぶ。

望むべく意思を持つこの「復活」の原因は、それがどれだけ昔のことであっても、必要とすべくそこでの原因の風景と融合し、それ以前との違いを見せる新たな原因の出来事に触れる。人間誕生のその時の背景には、すでにそれまでの太陽系の姿が、その原因の中に在る。

最初に人間としてこの地球に現れた数千の生命たちの中には、ある別の仕事をすでに終えて来ている 10 人程の存在が居て、その彼らがこの現代に集まったことで、この「復活」がこうしてここに形になる。

現代におけるそれぞれの姿は、EW の必要性から、ここに至る数千年の負の歴史のその原因を反映させるものとして、変化・変種に富んでいるが、そこには、生命としての類ない真剣さと覚悟がある。自分たちにしか出来ない役を担うために、あらゆる性質(次元)の負荷に抵抗せず、不自然さを普通とする世界からの嫌悪(違和感)やそこでの自分たちの異常さを受容する。

人間の形を持つ前、彼らは、太陽系の主な天体と、自らの